

パブリック・リレーションズの視点から再構成 する高校探究学習の可能性 —地域探究プログラム「CORE探究I」を事例として—

三浦 学

¹正会員 星の杜中学校・高等学校

E-mail: geo.earthplanet2015@gmail.com

学校教育の現場において、「パブリック・リレーションズ（PR）」という概念はまだ浸透していないのが現状である。PRは、組織や個人が社会との関係を築き、相互理解と信頼の土台を育てる営みとして、企業や自治体、非営利組織の広報活動などで多く用いられてきた。しかし、教育現場ではその可能性が十分に活用されておらず、特に高校段階の探究学習において、PRの視点が有効に働くのではないかと考えるきっかけとなったのが、本研究の出発点である。

Key Words : PRのライフサイクル・モデル, 学習探究, 学びの循環,

1. はじめに

高校生が自らの関心をもとに社会と向き合う探究学習において、単に知識を集めてまとめるのではなく、他者との関係の中で問いを再構築し、行動に移していくプロセスが重要となる。そうした中で、PRの持つ「伝える」「共感を得る」「関係を築く」という発想は、探究活動を単なる教科学習の延長線にとどめず、社会的な意味や影響力を持つ営みに変えていく力を秘めている。

2. 学びの循環に、PRの「ライフサイクル・モデル」を活用

本稿では、PRの「ライフサイクル・モデル」を手がかりとして、高等学校における探究活動がどのように社会と接続し、どのように学びの循環を生み出すかを検討する。このモデルは、一連の活動を「計画・実行・評価・改善」の循環として捉え、活動の持続性や柔軟性を高めるものである。こうした思考の枠組みが、生徒たちの主体的な学びを、より社会に根ざしたものとして展開する手がかりになるのではないかと考えた。

本稿の後半では、宮城県にある私立高校で実施された地域探究プログラム「CORE探究I」の事例を取り上げる。このプログラムにおいて、生徒がどのようにPRの視点を取り入れながら探究を進めたのか、またその過程でどのような変化や学びが生まれたのかを具体的に描き出す

ことで、教育と社会との関係を見直す実践的な視点を提供したい。

3. 研究背景

2022年度より本格実施された高等学校の新学習指導要領では、「総合的な探究の時間」がすべての学校で導入され、生徒が自身の関心や問題意識を起点に探究を深めることが期待されるようになった。この探究の時間は、知識の暗記や再現ではなく、問いを立て、調べ、行動し、振り返るという一連の過程を通じて、思考力・判断力・表現力を育成することを目的としている。

しかし、実際の現場では、探究学習が「テーマを調べてスライドにまとめて発表する」といったパターンにとどまってしまうがちである。その結果、学びが自己完結的なものに終わり、他者や社会とのやりとりを通じて深まるような広がりを欠くケースが多く見受けられる。このような傾向は、教員の探究設計における視点の限定にも関係している。「社会との接点を設ける」「他者に自分の問いを届ける」「協働的に問いを再構成する」といった発想が、指導の中で十分に組み込まれていないためである。

また、探究活動の評価においても、しばしば「発表資料の見た目」や「プレゼンの技術」といった表層的な側面が重視される傾向がある。これでは、学びのプロセスで生まれる葛藤や対話、関係性の構築といった、より本

質的な部分が置き去りにされてしまう。そうした問題意識から、本研究ではPRの枠組みを持ち込むことで、探究の質そのものを再構成できるのではないかと考えた。

4. 方法について

本研究では、パブリック・リレーションズ（PR）分野で広く使われている「ライフサイクル・モデル」を、高校生の探究活動に応用することを試みた。このモデルは、目標の設定、現状把握、目的の明確化、関係構築、戦略の立案、実行、評価、改善という8つの段階で構成され、コミュニケーションの全体像を体系的に捉える枠組みとして知られている。もともとは企業や行政の広報活動などにおいて、ステークホルダーとの良好な関係を築くために用いられてきたが、その構造の明快さと応用の柔軟性により、教育実践にも十分に転用可能であると判断した。

特に、本研究ではPR的視点が「関係性の構築」や「共感を得ること」「双方向性のある対話」に重点を置く点に着目し、それが高校生の探究学習にどのような意味を持ちうるかを明らかにすることを目指した。

具体的な実践の舞台としては、宮城県の前任校および現在勤務する高等学校において実施された「CORE探究」および「地理総合」の授業を対象とし、生徒が実際に取り組んだ複数のプロジェクトに注目した。これらの記録を綿密に分析し、探究活動の過程でPR的要素がどのように機能したのかを検証した。

観察・分析の視点としては以下の点を重視した：

- ・生徒が関心を持った社会課題をどのようにテーマへと昇華させていったか
- ・調査やインタビューを通じて、課題の構造や関係する主体（ステークホルダー）をどのように捉えたか
- ・発信や行動を通じて、自分の探究が社会にどのような影響を与えると捉えていたか
- ・中間発表や対話の機会を通じて、他者からのフィードバックをどのように受け止め、問いや仮説をどう修正していったか
- ・成果発表後のふり返りの中で、どのように「次の探究」やアクションへとつなげようとしていたか

さらに、これらのプロセスの中で生徒が次のような問いをどのように立てたかを注視した：「誰と信頼関係を築くか」「どのような共感を得たいか」「どのような変化を社会に促したいか」。このような視点が、単なる調査・報告に終わらない深い学びを支える鍵となり、探究の質をどのように変容させたかを明らかにすることを目指した。

5. 実践結果について

PRの視点を導入した探究活動では、生徒の問いが固定されるのではなく、他者とのやりとりを通じて柔軟に再構成されていく様子が観察された。あるグループは、「商店街の活性化」というテーマのもと、当初は「イベントを通じて来訪者を増やす」という方向で計画を立てていた。だが、発表の場で「商店街の人の声をきちんと聞いたのか」という意見を受け、視点を転換。商店街の店主や従業員にインタビューを実施し、「若い世代との接点がない」「常連客以外が減っている」といった実情に直面した。

それを受けて、生徒たちは「地域の人の声を伝える」という目的へと探究を再構築し、短編映像の制作へと踏み切った。この変化は、PRのライフサイクル・モデルにおける「目的の再定義」「戦略の再設計」「行動の更新」といった各段階が、探究の中に自然に取り込まれていたことを示している。

また、別の班は、自分たちの調査報告書を市役所の広報課に提出し、その内容をもとに行政との意見交換の場を設けた。さらに他の班では、地域イベントでの展示発表を通じて地域住民と直接やりとりを行い、フィードバックを次の探究に生かそうとする動きが見られた。

生徒同士のやりとりにおいても、自分の問いと他者の問いがどのように異なり、どこで重なるかを意識しながら話し合う姿が印象的だった。個別の探究が孤立するのではなく、関係の中で磨かれていく過程が生まれていた。

6. 考察と結論

このような実践を通して明らかになったのは、探究の本質が「情報を集めて発表すること」ではなく、「関係を築きながら、問いを深め直すこと」にあるという点である。つまり、探究とは他者との関係性の中で絶えず問い直され、進化し続ける対話的な営みである。とりわけ、高校生が社会との接点を持ちながら自己の関心を探る過程においては、自分の考えを表明し、相手の反応に耳を傾けることが、学びの深化と再構築の契機となる。

PRの視点を導入することで、探究活動は「問いを立てて終わり」ではなく、「問いを社会に届け、その反応からさらに問いを育てていく」循環型の学びへと変容していく可能性が示された。これは、自己完結的な学びから脱却し、他者との相互作用のなかで学びを再創造するプロセスである。生徒は単に情報を発信するだけでなく、自らの表現が社会にどのように届き、どのような影響を与えうるのかを意識するようになり、その意識の変化は、探究の質的な飛躍につながっていった。

教育の現場においても、こうした関係性の視点を踏まえた探究活動が広がっていくことで、生徒の学びはより開かれたものとなり、社会との対話が始まる。探究は「終わる」ものではなく、次へつながっていく「続いていく」営みである。生徒の問いは一時的な結論に到達するかもしれないが、それはさらなる問いの出発点でもあり、学びの終着点ではない。その意味で、PRの視点は教育の中に新たな問いを差し込む実践的なレンズとなり

うると同時に、教育と社会をつなぎ直す回路としても機能することが示唆された。

【参考文献】

- [1] 井之上 喬「パブリック・リレーションズ第3版」
日本評論社 2024年